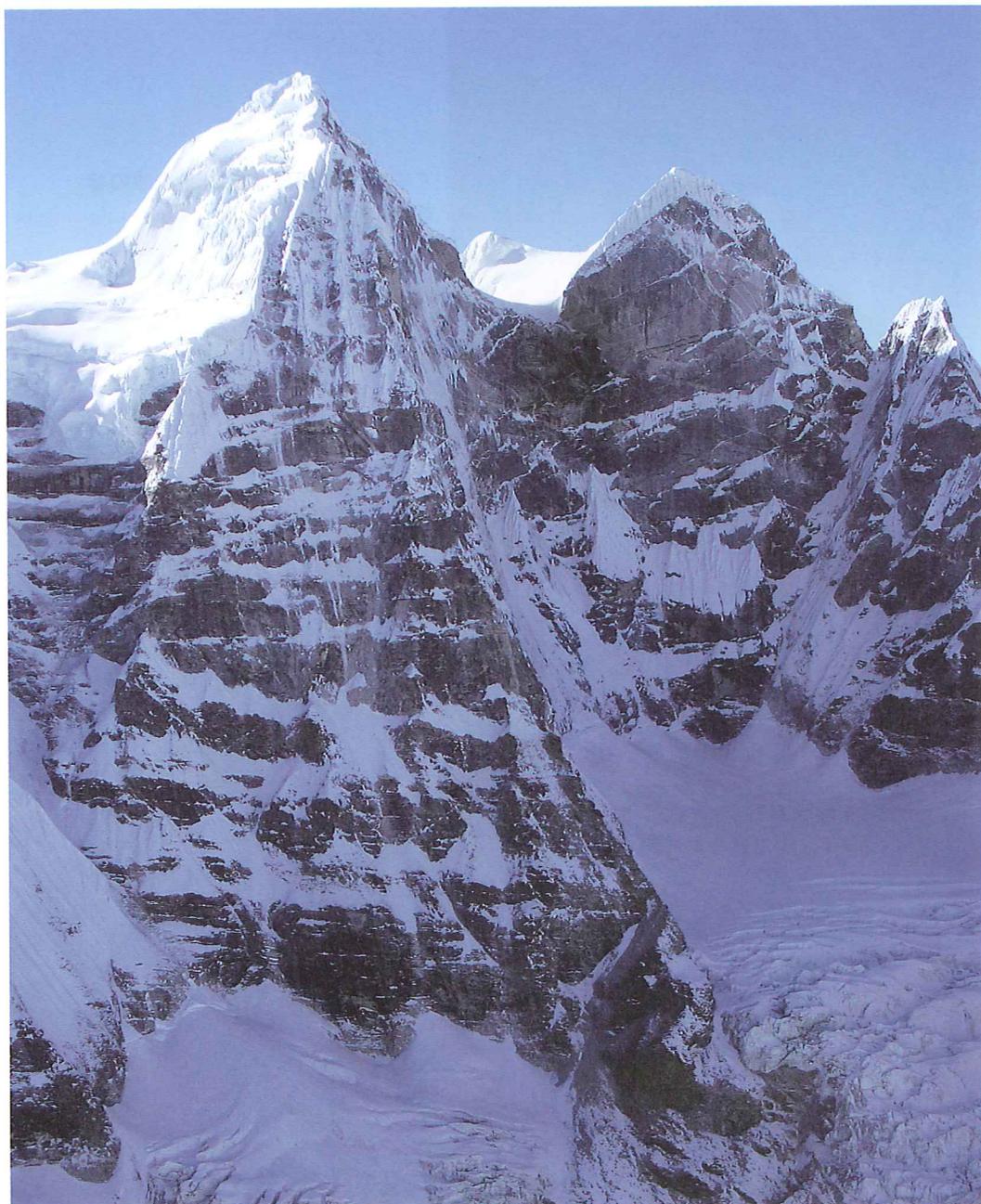




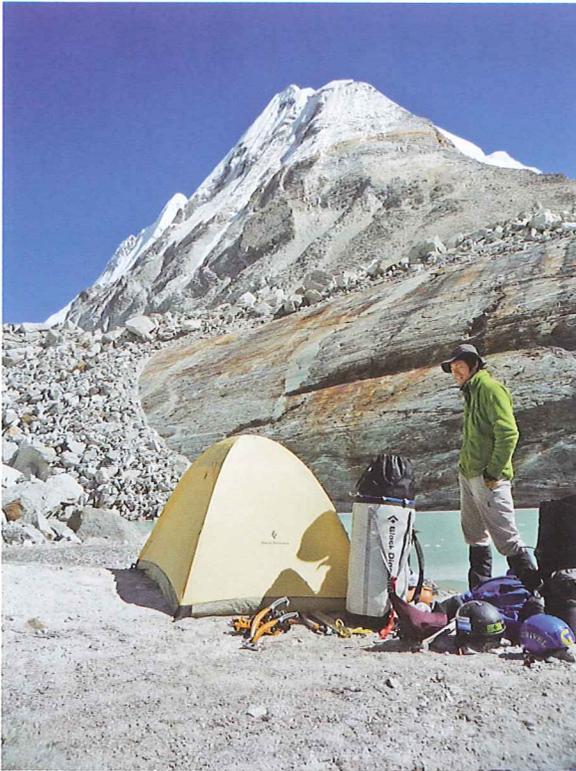
あゝ信州よ山の国 誇りは高しアルペンの
峯に輝く雪を以て 希望は高いや更に
さらば歌はむ諸共に 若き血潮のゆくまゝに
あした夕べの友は山 山は我等の姿なる
山は我等の姿なる

思誠寮々歌

第五チーム カンテガ峰北壁ダイレクト登山隊

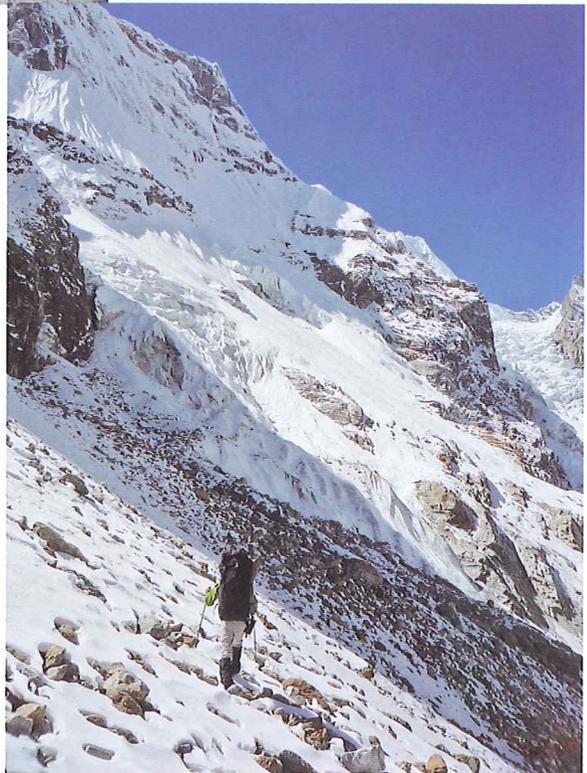


カンテガ全景、正面は北東壁 北壁は隠れて見えない



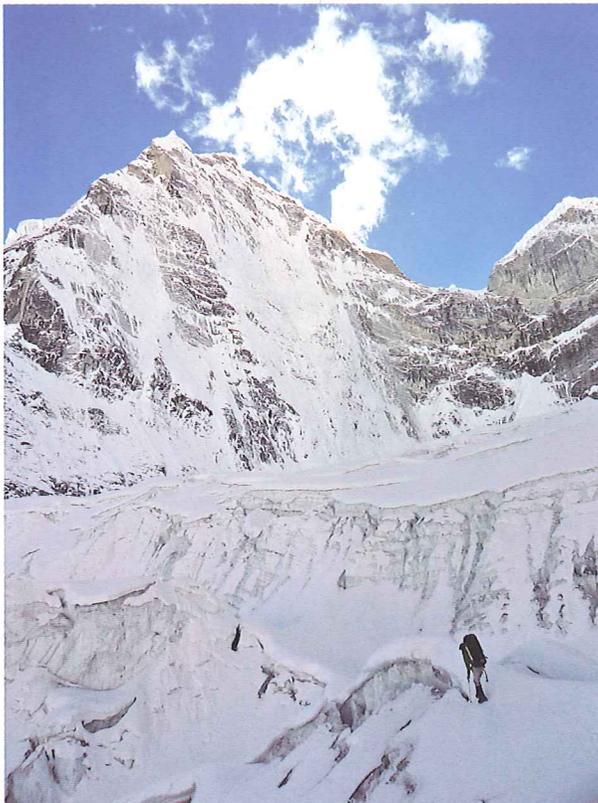
アプローチ初日は中間部の池のほとりで泊、佐藤

カンテガへのアプローチ、佐藤
この辺りはまだ緩やかな斜面





カンテガ北壁へのアプローチ 佐藤



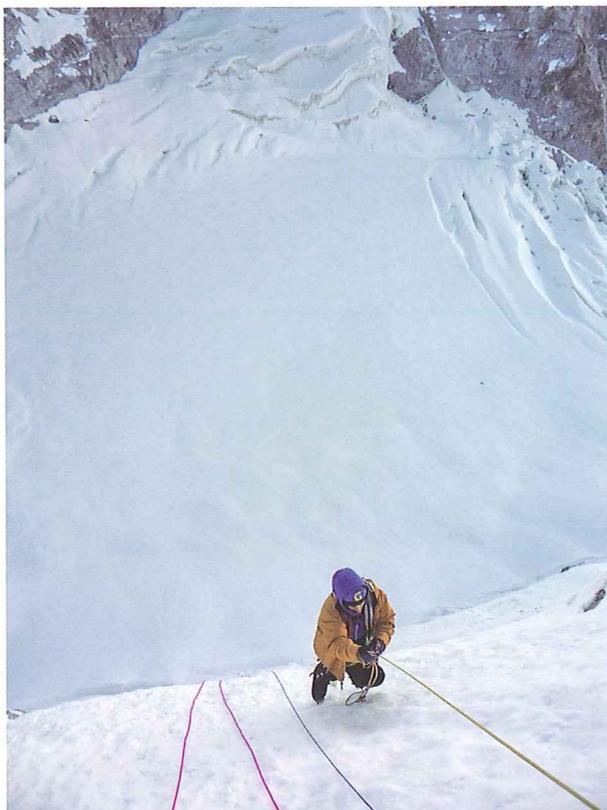
カンテガ北壁に向かって最後の
アプローチ、佐藤 セラックを
縫って登る



基部より北壁を見上げる



1ピッチ目、雪壁ルーフを越える横山



北壁下部とユマーリング
佐藤



荷揚げとユマーリング、佐藤 既に傾斜が強く、重労働



北壁中間部 佐藤



北壁中間部、佐藤



14ピッチ目、広大な氷を登る横山



敗退ポイント ここから95度の壁



カンテガライン 2006年と2008年のライン



登攀を終えて
左 佐藤 右 横山

第五チーム カンテガ峰(6,779m) 北壁ダイレクト登山隊

隊長 横山 勝丘

(1) はじめに

「カンテガ」とは、馬の鞍を意味し、エベレスト街道を奥まで進んで行くと、右前方にその名の通りの山容を現す。他の山からは距離を置き、特異な山容と相まってひととき印象的な山であるが、それが登攀対象として捉えられるかという点、また話は別だ。エベレスト街道側からは、登路となるラインはほんの僅かで、それも非常に急峻な氷壁だ。ノーマルルートはほとんど無いと言っても良いが、初登のルートはそもそも谷が違ふ。この山は、目指すクライマー自体が少ないとともに、簡単なルートは一切ない。

この山には北壁が二つある。一つは、エベレスト街道に面した壁で、かつてジェフ・ロウ等アメリカ隊がアルパインスタイルで登攀している。しかしこの壁はカンテガの本峰ではなくて、2峰に突き上げている。

もう一つの北壁は、トレッキングピークとして名高いメラピークと同じ谷をたどり、そのどん詰まりに位置する。この壁は、2000年にロシアのバレリー・ババノフによって単独で登攀されている。しかし、この登攀に関し

てはFIXを大量に用い、かつ山頂までは抜けていない。壁は非常に急峻なまま1,300m伸び上がり、質の良い氷が一面に広がっている。ババノフはこの壁の右端を登っているが、この真ん中にはまだ未登のままだ。

2006年秋、横山勝丘と佐藤祐樹（ともに信州大学学士山岳会）は、初めてのヒマラヤ遠征に出かけた。狙うはこの壁のダイレクトライン。初めてこの壁を目の当りにした時の興奮と恐れの入り混じった不思議な気持ちは今でも忘れられない。これほどまでクライマーの心を打つ壁を見た事はなかった。少なくとも経験の少ない我々には。

結果は、惨憺たるものだった。それまで、アラスカや南米の山で積み上げてきた経験が全く役に立たなかった。標高6,300mまで行って見上げた残りの500mは、果てしなく遠いように感じられたし、ガツンと何かに頭を打たれた感じだった。もっと強くなって帰って来い、と。

帰国後、私達は再びいくつかの遠征と、膨大な量の国内でのトレーニングを積んだ。

2008年秋、我々は2年ぶりにカンテ

が北壁の基部に立っていた。見上げるその壁は相変わらず激しいまでに屹立していて、僕たちを震えあがらさせた。一方で、これまで培ってきた自分たちの技術、経験、そして信州大学で鍛え上げた忍耐力を駆使すれば、簡単ではないにしろ、登れるのではないかと、そう思っていた。

結果、2日間登って標高6,580mで敗退。もっと粘れたのではないかと、そもそも我々の技量は十分だったのか…そんな事を何度も考えた。2006年のトライでは6,300m。今回はそれよりも300m近く標高を上げた。のこり200m。あと僅かではないか。そんな慰めの言葉も頂いた。しかし、いずれにせよ結果は「敗退」の二文字で語られる以外はない。

この敗退から半年以上の時間を経て、僕は今こう考えている。「カンテガに特別な深い意味はない。あるのは、次に向けての教訓のみだ。」と。そういう観点からこの報告書を記したい。

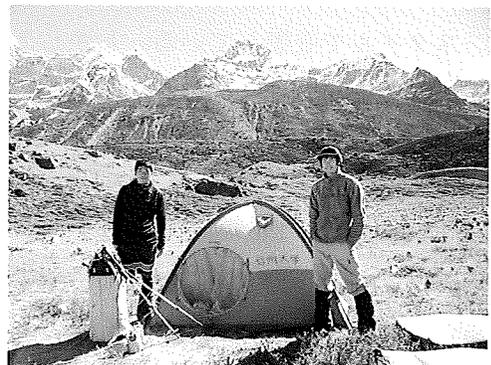
この遠征に当たって、信州大学学士山岳会からは故小川勝OBの遺された基金を頂き、さらには日本山岳会より遠征の助成金を頂いている。そういった意味でも、何かしらの形として記録を残すべきだろう。一部、次回への覚書風に、わかる人でないと理解できない部分も多々あると思うがお許しいただきたい。自分自身と、同じような登山を目指すクライマーの次へのステッ

プのために、この報告書を残したい。

(2) 第1回遠征 2006年

何度となく歩いたモレーンを、転びながら歩いた。これさえ終われば、と思って横切った氷河でも、一体どれだけ転んだ事だろう。氷河が終わって、後はただ穏やかなモレーンを歩くだけだった。足を進めてさえいけば良いはずだった。それなのに、足取りはまるで老人のようにフラフラだ。荷物が肩に食い込み、息を整える。再び歩き始めたと思ったら、思い切り転ぶ始末。先ほどから繰り返している悪態を再びつく。「情けねえ」。

10日ほど前だ。その時も、順応を終えてこのモレーンを歩いていた。果てしなく遠く厄介なこのアプローチも、あとは本番の一往復だけだ。「それ以上もそれ以下もない」、そう言い聞かせた。そして、10日後は一体どんな気分でのこのモレーンを歩いている



10月23日 アプローチ開始を前に、BCにて。横山(左)、佐藤(右)



ののだろうかと思像した。どんなに体がぼろぼろでもいい。心に大きな満足感さえ抱けていれば、這ってでもこの道を進んでいける…。

BC（ベースキャンプ）へのアプローチの2日目に佐藤が風邪を引いた。それがそのまま僕に引き継がれた。4,600mの峠越えを含む5日間をかけてたどり着いたBCからは、カンテガは全く見えなかった。風邪なのか高山病なのかわからない状態での荷揚げは、大学に入って最初の合宿を思い起こさせてくれた。BCから2時間、穏やかなモレーンを歩いた先に現われた、想像以上に荒れた氷河を目にし、僕は愕然とした。カンテガは姿を現してくれたが、目指す北壁は相変わらず恥ずかしがり屋のままだった。順応は名もない小ピークの6,200mで2泊し、比較的順調に終わった。しかし咳は相変わらずのままgo upの日を迎えた。35kgの荷物が肩に食い込み、想像していた以上にABC（前進ベースキャンプ）までの道程は遠かった。そして、2日かけてたどり着いたABCから、初めてカンテガ北壁を見ることができた。

啞然として息が詰まった。眩暈がした。「wall」。ここはまさに建物の壁を想像すればよい。1,200m垂直のまま、何一つ遮るものがない。多分、山頂から物を落とせばどこも傷つくことなく氷河まで落ちてくるだろう。こんな傾斜が強くて氷に覆われた壁があっ

いものだろうか。そして壁に太陽の光が当たる事は一秒たりともない。凍て付いた1,200m。概算すると、予定通り行けばざっと100時間は太陽を拝むことができない。でも、行けるという確信はあったのだ。薄いかもしれないが、氷は1,200m、ただ真っ直ぐに延びていた。

12月5日、懸案のベルクシュルント越えは、苦勞しながらも何とか越えた。壁に張り付いた白いものが雪ではないかと気を揉んだが、それなりに使えるもので安心した。決して順調にとはいかなかったが、それでも着実に進んだし、薄氷を積極的に使ったミックスクライミングを楽しむ余裕さえあった。夕暮れがやってきて、僕たちは垂直の氷壁の中でロープを渡し、それにぶら下がってハンギングビバークをした。ロープは尻に食い込み、ものの30分で苦痛に変わったし、ストレスも溜まった。それでも、気持ちだけは非常にポジティブだった。行ける、という自信は変わらなかった。

翌日の1ピッチ目は、のっけから神経を使うピッチとなった。傾斜の強い壁に張り付いた氷は、それまでとは違って使えないものだったが、右に左に動いていくと、上部氷壁への抜け口が見えた。このピッチにはリードに1時間以上を費やしたが、それは単に難しさの為だけではなかったようだ。寒いのだ。リード中、不安定な危うい場

所で、僕は何度も手袋の中で手を丸めていなければならなかった。

それでもこのピッチで下部のミックステ帯を抜ける事ができたようだ。僕は嬉しくなった。「よし、この調子ならいける」。寒さは相変わらずだったので、この先からリード中でもダウンジャケットを着る事にした。これから先はそれほど難しくないように見えた。ダウンジャケットを着て登っても問題ないだろう、と。次のピッチは問題なく登れた。しかし、登っても登っても一向に体が温まらない。そして、次のピッチから徐々に難しくなりはじめた。フォローは、重荷を背負っての辛いユマーリングだ。荷物を背負った



拷問の図。2006年、カンテガ北壁中間部をフォローする佐藤

瞬間に、呼吸が激しくなる。標高と寒さも相まって、フォローはまさに拷問そのものだ。

いよいよ、氷壁は垂直になった。完璧な青氷。僕は登り始めた。そしてす

ぐに思った。「これはまずい」と。ダウンジャケットを着ている事が、登り辛さに拍車をかけているのだろう。体が自由に動かない。すぐに腕と足がパンプする。情けないが、60mロープを持っているにもかかわらず、40mでピッチを切らざるを得ない始末だ。そして、相変わらず体は冷え切ったままだ。手指は痺れて、時折感覚がなくなる。頭上に続く青氷は、果てしなく続いているように見えた。そして、最後のちょっとしたロックバンド下の氷は、50mくらいにわたってハングしているように思えた。ルート上に、僕達が腰掛けられるだけの場所は、一切見えなかった。時間は既に4時を回っている。あと1時間と少し経てば、すぐに夜の帳が下りるだろう。僕たちは少し焦った。今夜もハンギングか…。それよりも前に手足が凍傷になってしまう。

その時、ルートのかなり左のほうに、一ヶ所氷柱の下がった洞穴のようなものが見えた。あそこしかない。本当に、1,200mの壁の中で座れそうな所はそこしかなかったのだ。僕は佐藤にそれを提案した。佐藤もそれを理解したらしく、すぐに進路変更をした。最後の最後まで壁は傾斜を弱めなかった。リードの苦しむ姿が見える。「頑張れ！」本気で叫ぶ。そして、日が沈んだ。一気に周囲は暗くなる。気温はぐんぐん下がる。耐えろ、耐えるしか

ない。そして、冷静さを保て。洞穴の直下5mで、何のはずみか、佐藤がヘッドランプを落とした。しばし呆然。ほうほうの態で氷柱の下へたどり着くと、そこは半洞穴のような所で、決して快適とは言えなかったが、どうにか夜を過ごせそうな場所だった。佐藤は半洞穴にすっぽり身を隠したが、入ってしまうとそれ以上動くスペースは得られなかった。僕はそこに付着した小さな氷の棚に座り、足を空中に投げ出す。それだけだった。ピバーク中、僕はほんのちょっとした気の緩みで大事なシュラフを落としてしまった。クライマー失格である。本当に情けない話だが、ただただ疲れていた。標高の影響もあったかもしれない。寒さの影響もあったかもしれない。それでも、集中力だけは切らさないでいるつもりでいた。この洞穴に入って安心してしまったのだろうか。正直一杯一杯だった。

佐藤と翌日以降の行動について話をした。物を落としてもまだ、行ける可能性は捨てていなかった。しかし、冷静に話をしてみて、明日以降あの急な壁を登り切る自信、結局それこそがなかったのだ。最も大切な要素。それが欠如していた。手足の凍傷も心配だった。明日以降クライミングを続けていれば間違いなく手足凍傷を負っていただろう。それほどまで、昨日と今日では季節それ自体が変化していた。完全

に冬が始まってしまっていたのだ。傾斜の緩い氷雪壁ならまだしも、垂直の青氷を500m続けて登り切る自信は、残念ながら持ち合わせていなかった。

翌朝、冷たい強風に耐え切れず、さっさと洞穴を出た。向かう方向は、下だ。あっけない。4時間かからずに僕達は氷河に降り立った。ふらつきながらABCまで戻ってテントを張る。今日はこれ以上動かたくなかった。午後になって、風はさらに強さを増した。テントは完全に傾き、外に出る気もしない。思わず笑った。「相変わらず運のいい僕たち…」。

翌日、風は相変わらず強く吹き荒れていた。壁を振り返るでもなく、ただ一目散に氷河を降りる。さっさとBCに帰って美味しいものをたらふく食べるんだ。しかしこの時は、BCまで8時間かかるとは思ってもいなかったのだった。

僕たちの弱さが故の完全なる敗退。BCに戻るのも必死になるくらい体力が吸い取られた。そう、ただ一言、帰り道のモレーンで口から出る言葉はただこの一言だったのだ。「あ～、情けねえ」。

カンテガ北壁。世界最高クラスの壁とは言えないかもしれないが、少なくとも僕が目にした世界の壁の中では、スケールも傾斜も内容も、群を抜いて素晴らしいものだった。いくらFIXを用いたとはいえ、2000年のババノフ

の単独クライミングは驚嘆に値する。しかし、カンテガの北面は北東壁も含めていまだアルパインスタイルでの成功がない。僕がBCに持っていった本の中に、横山秀夫の「半落ち」があったが、カンテガ北壁はまさに「半落ち」である。それを「完落ち」にすべく僕たちが挑戦したが、勝負にもならなかったと言っているだろう。2日間、16ピッチのクライミングで6,300mまで達した。残り500m。これはよくやったと言っているものか？ 僕たちの中では、完敗だ。この壁を登るには、やるべき事が沢山ある。本当に強くなって、完全な準備をしなければ、間違いなく登れない。

まず、順応を完璧にしておかなければならない。これがほとんどを占めていると言っても過言ではないだろう。順応ができていなければ、リードのパフォーマンスにも支障を来すし、荷物を背負ってのフォローはまさに拷問だ。疲れは溜まる一方だし、集中力も落ちる。ただ、この場合はそういう基本的な事ばかりではないのだ。6,000m台後半であれだけの氷を登るには、少なくとも7,000m台で自由に動き回れるだけの体を作っておかなければならない。敗退した上部の状況は、500mにわたって最低でも85度、ほとんどが90度の青氷のセクションだ。2ヶ所ミックスが現われるが、そこはハングしているし、壁全体を見ると、若干ハ

ングしているように思える。つまり、仮にそれが標高の低い場所にあったとしても難しいのである。技術的な難しさではなく、継続してそれなりの難度の壁を登る持久力、それが必要だ。6,000m台後半でそれをこなすには、間違いなく7,000m以上で完璧な体作りをしておかなければならない。

次に、時期の問題だ。今回は完全に冬が始まってしまい、気温は-15度、加えて、吹き飛ばされるのではないかと思うほどの強風が吹き荒れていた。初日は非常に穏やかな天候で、クライミングのパフォーマンスも最大限に引き出せたように思う。それより前は2週間ほど、そんな穏やかな天候だったのだ。これは一概に「いつの時期がよい」などと言えるものではないが、今回の経験からすると、さらに2・3週間ほど時期を早めれば比較的穏やかな天候の中登れるのではないかと感じた。それより早いと氷の形成が不十分のように感じるし、春は天候が安定しない上に、氷が無くなっているとババノフは言っていた。実際にいつがベストなのかは行ってみなければわからないが、僕たちが持っている情報はそれしかないのだから、それを信じて行くしかない。

ビバークのシステムについても考えなければならぬし、荷揚げのシステム、食料、装備についての検討も必要だ。特にビバーク装備は最大の懸

案かもしれない。今回は非常に小さな軽量テントを持っていったが、それを半分でもいいから張るスペースは皆無であった。ポータレッジとは言わないまでも、バッドテント等の準備は不可欠だろう。それも非常に軽量のものを用意すべきだし、シュラフも二人用など、最新のものを吟味して選ぶ必要がある。

ここまでして、ようやく勝負になると思う。やるべきことは沢山ある。しかし、一番変わらなければならないのは、僕たち自身が強くなること。それではなければ、今度こそ僕たちは壁から振り落とされる。そのくらいの気持ちでいなければだめだ、壁に対しても失礼である。ただ行きたいという欲求だけで登れた時代はもうおしまいだ。強くなれ、強くあるべし！

〈次回に向けての対策〉

・時期を2～3週間早める

12月は寒すぎる、日が短い。以上の理由から、条件が厳しくなるゆえ、次回は冬が始まる前、すなわち11月中にトライする必要がある。

・7,000m台を体験する、順応を完璧にする

2007年に7,000m台中盤の体験と7,000mでの氷雪壁の体験（カンテガは6,000m台の山だが、壁の難しさを考えると、更に高い場所で楽に動けることを実感しておく必要もあるので

は？)

→パミール/コミュニティ(7,495m)

ノーマル&ハンテングリ北壁

→パキスタン周辺の7,000m峰

2008年本番前に順応→チョー・オユー、もしくはムスターグアタ辺りで順応後ネパール入り

・食料を減らす

今回の2/3にする

今回 昼900Kcal、夜530Kcal、朝420Kcal、計1,850Kcal →1,200Kcal
昼飯はかなり減らせる、今回は結局ミニチョコバー3本のみしか食べなかった

食べなくても動ける体作り、サプリ等も活用する

・ギアを減らす

比較的岩がしっかりしている、氷が多い

エクストラカムをなくして1セットに（エイリアン緑～キャメ#2）、ピトン計6枚ほどに

スクリューは新品10本、下降用スリング15～20m、アイスフック、フックはいらない

今回カラビナ40枚→25枚へ、カラビナをさらに軽量化すれば計900g減、スリング12本ほど

・荷揚げ方式の変更

ホーリングシステム採用→フォローの負担減、検討の余地あり

・ビバークシステムの変更

二人用バッドテント開発（ブラックダイヤモンドに働きかける）

→二人用で1kg台、中間にスリングを通さない（二人用シュラフを使うため）、底はマット？

二人用シュラフ開発（MHまたはFFに働きかける）

→0°C用のシュラフと同じくらいのダウン量で1kg以下、ファントム32×2=1,200g、底は薄く？

・ウェアのレイヤードの変更

つなぎのインナーダウン、ソフトシェル有効

・クライミング能力の向上を図る

氷を登る際、無駄な力で打ち込みまくっている→トップロープで、最小限の力で登る限界を探る→AI5を疲れることなく500m登る能力を確立する

氷を登っている際、肛門に不快な刺激が走る→ウンコがしたくなくなるようにする、病院？



2006年登攀を終えて。佐藤

・その他

小便ボトルの活用、日数は下降を含め5日間で充分

(3) 第2回遠征 2008年

・日程

10/03～10/13 出国、準備、カトマンズ～ルクラへ移動

10/14 ルクラよりキャラバン開始
ルクラ～チュテンガ

10/15 チュテンガ～ツェットララ

10/16 ツェットララ～タンナン

10/17 タンナン～カンテガBC
(4,700m)

10/18～10/20 メラピーク(6,473m)
ノーマルルートより順応

10/21～10/22 レスト

10/23～10/24 BC～C1（第一キャンプ）(5,200m)～HC(5,500m)

10/25～10/27 カンテガ北壁アタック、下降

10/28～10/29 HC～C1～BC

10/30 レスト

10/31～11/2 バックキャラバン開始、BC～コテェ～ツェットララ～ルクラ

11/03 ルクラ～カトマンズ

・行動記録

〈10/03～10/13 出国、準備、カトマンズ～ルクラへ移動〉

待ちに待った出発。横山はJALでタイへ行ったあと、ビーマンバングラ



デシュ航空というなんとも怪しげな航空会社でカトマンズへ飛ぶことを決めた。佐藤は一日遅れの便でカトマンズ合流だ。しかし、いきなりのアクシデントが到来した。困ったことに横山の荷物が日本からやってこない。ロストバゲージだ。サービス、乗客の質まで最低で、「いち早くピーマンとはオサラバしたい」と心に誓っていたのに、まさかカトマンズに着いてから一週間もお付き合いする羽目になるとは…。

まあ仕方ない、まずはカトマンズでの準備だ。二度目ということもあり、首尾よく準備を終え、佐藤だけ先に飛行機でルクラに入り、残りの準備を進めることにした。

(横山)

十月八日、佐藤がルクラで三回目の朝を迎える。外に出てみると、なんだか騒がしい。ルクラ空港でカトマンズからの飛行機が爆発、炎上したらしい。自分は寝ていて気付かなかったのだが、ものすごい爆音がしたと聞いた。空港まで行ってみると、人だかりができていす。火はすでに消され、警察による検分が始まっている。人だかりの隙間から覗いてみると、黒こげの死体があちこちにごろごろしている。即死だったのだろうか、ある者は口をあけ、ある者は手を大きく上げたまま、黒い塊となっていた。(後に聞いた話では即死ではなく、事故後の火災で焼け死んだ人が多かったらしい。)

人だかりの中には携帯電話のカメラで写真を撮っている者もいたが、自分は気分が悪くなり、すぐ立ち去った。その日の晩にカトマンズにいる横山と連絡をとると驚くことを聞かされた。まさにその落ちた飛行機に横山が乗るはずだったというのだ。横山は荷物がまだ来ないため、その飛行機には乗らなかった。不幸中の幸い。なんという偶然。これは何を意味しているのだろうか、真剣に考えてはみたものの、答えはでなかった。

(佐藤)

今日もいつものように元気はつらつウォーキングの時間だ。午後になるとエージェントであるコスモトレックから空港までの間をサンダルで往復する毎日だ。最初は車での往復だったが、時期はちょうどダサイン祭の最中で、送り迎えをしてくれるスタッフは誰もいない。まあちょっとしたエクササイズだ、そう思って空港との往復を毎日の日課とした。しかし、相変わらず荷物はやってこない。ピーマンのオフィスに行っても、鍵が閉まっている始末。「今日も駄目か…」とコスモに電話を入れて、翌日のルクラ行き予約をキャンセルしてもらう。

翌朝、墜落は起こった。荷物が来なかったことを喜ぶべきか、そもそも最初からちゃんと荷物が届いていたらこんな騒動にも巻き込まれなかったはず。まあいい、あまり深くは考えない

ようにしよう。また一つ話のネタを皆に提供できたということだ。

＜余談：2009年4月、アラスカに旅立つ時のこと。僕は昨秋カナダに出かけた時使った旅行代理店で再びチケットを買った。まあ今思えば「セレブツアー」なんていかにも怪しい会社名なのだけれど、僕は他の代理店よりも僅か3,000円だけ安い値段に導かれ、直前になってセレブでチケットを購入することにしたのだ。いよいよ出発の日。意気揚々と成田に向かい、いつものように自動チェックイン！ と思いきや、何だかおかしい。予約がないというのだ。そんなはずはないと思い、航空会社スタッフに問い詰めるも、「代理店に電話してください」。仕方なく代理店に電話をしてみる。繋がらない。何度かけても同じこと。この時ようやく自分を取り巻く状況を飲み込めた。もう一度航空会社スタッフに確認してみる。やはりない。一度仮予約は入っていたとのこと。しかしその後、代理店からの入金はなく、仮予約は取り消されたそう。スタッフが僕に問いかける。「あの～、どちらの代理店をご使用になりましたか？」「セレブツアーです」と僕。「…あ～…」と沈黙。「もうその会社はここ何週間も連絡が取れないままなんです」。つまり僕は彼らの計画倒産にまんまと騙されていたのだ。大きな荷物を抱えて再び実家に帰る時の虚しさ。しかし、その

日の夜にはこう思うことにした。「また一つ、皆にかなりイケてる話のネタを提供したな」と。

翌日、たまたま開いていたピーマンのオフィスに殴り込みをかける。同じような境遇の旅人は他にもいて、強く抗議すると、ようやく重い腰を上げて荷物を探し始めた。それによると、僕の荷物はインドにあるらしい。なぜ？ そう思うが、もうそんなことは関係ない。見つければいい、無事届いてさえくれば。その二日後、ようやく馴染みのあるパックが僕の手へ渡った。サングラスが抜き取られているというおまけつきで…。

(横山)

〈10/14～10/17 キャラバン、ルクラ～チュテンガ～ツェットララ～タンナン～B C〉

登山に入る前からいろいろなことがあったが、横山の荷物が無事届き、やっとキャラバンを開始することができた。このキャラバンコースは、通常メラピークに行くトレッカーがよく使う。4,600mの峠を越えて行くので、順応にもちょうどよい。さらに二年前に通った時よりもロッジが多くなり、整備が進んでいた。しかし、馬やロバが歩けるほど整備が進んでいるわけではなく、すべて人の手で荷物を運んでもらうため、どうしてもポーター代が高くなってしまふ。そこで二回目の今回は持っていくものをとことん削っ



た。キャラバン中のポーターと自分たちの食料はロッジで食べる。ポーター代が値上がっている今は、荷物を重くして自分たちの食事を持ち、ポーター代にお金をかけるより、ロッジ代を出した方が安あがりだと聞いていたからだ。前回持っていったトイレメントも持たない。食料もネパール人のコックと相談しながら削り、なるべく軽量化を心がけた。結果、2年前より六人も少ない、七人のポーターで行くことができ、費用を抑えることができた。

(佐藤)

〈10/18～10/20 メラピークノーマルルートより高度順応〉

BCからメラピークへ順応に向かう。メラピークのノーマルルートは非常に簡単だ。ロープが必要なところは、ほぼ無いに等しい。あえて必要だとすれば山頂直下のクレバスが開きつつある斜面であろう。この時期は人も非常に多く、HC（高所キャンプ）はテント場に困ってしまう程の混みようだった。我々は最初のテント場に予定していたC1を予想以上に早く着いてしまったため、予定を変更し、その日のうちにHC（5,820m）まで進んだ。翌日には無事山頂を踏み、HCに戻ってくる。その翌日にはもう一度山頂まで行き、一気に下りBCまで戻ってきた。これで順応は大丈夫だと思われた。

(佐藤)

2006年の時は、順応の不備も失敗

の原因の一つだった。キャラバン中に二人揃って風邪を引き、順応は名もないピークで慌しく行なった。それは半分クライミングと呼んで差し支えないほどの急傾斜で、心休まることもできず、無理矢理感がブンブン漂う順応だった。引き換え、メラピークの何と楽なこと。やはり順応はこうでなければ。まあ、どこぞのスイスチームは、アンナプルナの順応でテンカンボチェ北東壁というとんでもない壁を新ルートで登ったりしているが。そんなモンスター達は放っておいて、我々一般人はこういう楽な山での順応が一番だろう。そのために払う金など微々たるものだ。調子は良く、三日目にはハイキャンプからの標高差700mを一時間半で登ることができた。

(横山)

〈10/23～10/24 BC～C1 (5,200m)～HC(5,500m)〉

カンテガ北壁へはここからが非常に長く、つらい思いをする。まずは永遠を思わせるモレーンを突破し広大なガレをひたすら登ると、大きなロックバンドの上にする。ここには凍りついた氷河湖があり、日射も良好。そこをC1とした。ここまでのアプローチは前回とは全く違っていた。モレーンはことごとく形を変えていた。一番驚いたのは、ロックバンドの上にするとき、前回何もなかったガレの斜面に大きな、えぐられたような谷ができてい

たことだ。上部の氷河湖の決壊跡か、ただ水が流れ徐々に削ったのか、2年の間にここまで変化するものかと、ただただ驚いた。C1でアメリカ隊のギルモア、マホニー、フレディという屈強な三人に出会った。彼らもこれからカンテガ北壁を目指していたのだが、幸い我々とは目指すルートが違うことで、ほっとした。我々はカンテガ北壁のほぼ真ん中の直登を目指していたが、彼らはその左方のカンテから登頂を目指す。彼らは小型の衛星電話を持ってきており、非常事態のときにはこれを使用するらしい。我々の非常時にも使っていていいよと言ってくれた。気さくで陽気なナイスガイたちだった。

C1からしばらくモレーンを歩くと、やっとHCへ通じる氷河に出会う。ここから先、降りてくるまで太陽を一切拝むことのできない影の世界に入る。前回の極限的な寒さを知っているため、気が引き締まる。この氷河の末端は状態が悪く、前回と同様に入り組んだ迷路のようであった。しかし今回はアメリカ隊が先行していたので、彼らの巧みなルートファインディングのおかげで難なく通過できた。

2年ぶり、またこのHCに戻ってきた。相変わらずの広大かつ急峻な1,000mの壁を見上げると、嫌でも動悸がする。壁を目の前にして、自分たちの小ささを身にしみて感じる。前回よりは装備も、技術も、タクティクス、

順応もうまくいっているという自負が自分たちを支えていた。壁は前回より明らかに白い部分が多い。上部の方はテラテラと青く光っているので間違いなく氷だ。中間部～下部は真白、雪なのか、氷なのか判断はつかないが、前回より登りやすそうな印象を受けた。

(佐藤)

〈10/25～10/27 カンテガ北壁アタック〉

10/25 2:00起床 3:30HC出発 4:00取付 4:30登攀開始 19:00ピバーク地

1P目 (J、55m、AI/60° /AI4+)

シュルトルーフ越え～雪壁～凹角内の氷

2P目 (J、50m、AI5R) 薄氷の壁～凹角

3P目 (J、50m、AI5) 薄氷の壁～凹角 (右上～左上)

4P目 (S、30m、AI4) 凹角 (直上しすぎて戻る)

5P目 (S、50m、AI4R) 広い氷壁を左上～直上、大きな岩角でピッチを切る

6P目 (S、45m、AI4mixed) メガネハング左際まで

7P目 (J、50m、AI5mixed) ハング上右トラバース、小ナッツ使用

8P目 (J、45m、AI4+) 薄氷右上mix、2年前のピバーク地まで

9P目 (J、45m、AI4/M5) 左上～直上、核心



10P目 (S、30m、AI4R) 緩やかに右上、ハング下まで、ビバーク後に横山と話したことだが、今回ほど死を意識した壁は今までなかった。周りの友人がアラスカで、またヒマラヤで、日本で亡くなり、さらにルクラでの飛行機事故。またカンテガ北壁の全容を前もって知っていたこともあるだろう。正直、私は壁を登る直前まで恐ろしかった。だが、山頂に立った時のイメージ、それを想像するだけで心が打ち震えるほどの喜びがあった。これが自分をここまで突き動かしていたのだと思う。出発前日の夜、ふと眼を覚ました。外で足音が聞こえたような気がしたが、またすぐに寝た。朝起きると、不思議と恐怖心は消えている。2時に起床し、アルファ米2食分をそれぞれの腹の中へつめる。

(佐藤)

まだ暗いうちにシュルントに到着する。HCから見た限りではシュルントは全く問題ないように見えたのだが、実際来てみると、容易に登れそうな場所はなかった。どこも下はポツカリと穴があり、かつ上の雪壁はオーバーハングという状態だ。いろいろ検討した結果、1ピッチ目担当の横山がオーバーハングの雪壁を掘りながら進むことになった。ピッケル2本を埋め込み、強固なアンカーを作る。ハング内の雪は脆弱そのもので、スノーバーを埋めても抜け出てくる始末。ジワジワと進

むしかない。このリードには一時間半ほどを要した。ルーフの抜け口は、スノーバーも足りなくなってアックスを一本埋めてそれに体重をかけた。非常に緊張を要する作業だった。今回、技術的に一番難しいピッチは紛れもなくここだったが、決して楽しいピッチではなかった。

シュルントを越え、3ピッチ交替で高度を稼いでいく。下部壁は4～5級のバックスノー&薄氷で、ピックはサクサク入るのだが、支点を作るのが大変で、わざわざ掘り返して岩から支点を取らなくてはならない。必然的にランナウトを余儀なくされたし、ビレー点を構築するのに苦勞を強いられた。当然傾斜は強く、リードもフォローも苦勞は変わらない。前回とほぼ同じ場所を登っているのに、ルートの概要はつかめているのだが、それでもライン取りのミス等でかなりの時間を食ってしまった。2年前のビバーク地を過ぎる頃には、夕暮れが迫ってきた。

9ピッチ目、横山が核心であるミックス帯を越える。そろそろビバークの用意をしたいところだが、それが可能なようなレッジは予想通り一つもない。この時のためにハンモックを用意していたのが役に立つ時がきた。10ピッチ目を佐藤が行くが、時間をかなり食ってしまう。もう辺りは真っ暗で、下でビレイする側としてはイライラが募るばかりだ。結局、上部に氷の

ハング帯が見え、その下でハンモックを吊るすこととなった。

ハンモックを吊るし終えた頃には既に夜遅く、ホットミルクを飲み干すと二人ともすぐに寝てしまった。だが、寝たといっても寒くて1時間ごとには起きていた。しかも、予想に反してハンモックが使いづらい。なぜ国内で試してこないのか、初歩的な誤りが早速露呈することとなった。それでもロープにぶら下がっただけの前回よりは断然楽なのだが…。

(横山)

10/26 4:00起床 6:00出発 18:00ビバーク地
11P目 (S、50m、AI4) 右上して雪壁へ
12P目 (S、55m、AI4) 薄氷～雪壁
13P目 (J、60m、AI4) 緩傾斜の氷
14P目 (J、50m、AI5) 緩傾斜～85°、レッジまで
15P目 (J、50m、AI5) 第一ロックバンド下まで、85°直上
16P目 (S、50m、AI5) 第一ロックバンド右上～直上85°～90°
17P目 (S、45m、AI5) 青氷85°～90°
18P目 (S、35m、AI5) 青氷85°～90°、第二ロックバンド下まで、ビバーク
19P目 (J、20m、AI5+) 青氷90°～
朝アルファ米を食し、出発。体はす

でに疲れてきている。13ピッチ目を越えた辺りから、硬い氷も多くなり、スクリュウの効きがよくなってランナーは取りやすくなる。一方で、傾斜はさらに増して、ここからはずっと80度～90度の氷が永遠と続く。ふくらはぎが悲鳴をあげ、腕もすぐにパンプする。動作ひとつひとつの呼吸が激しくなる。何をするにもいちいち呼吸が荒れる。標高とは全く厄介なものだ。バイルひと振りひと振りに渾身の力を込めるが力が入らなくなってくるのを感じる。氷は堅く傾斜もあるが、体は悲鳴をあげているのでなかなかランナウトができず、スピードは上がらなかった。それでも前回敗退したところを越え、第一ロックバンドに入っていく。予想以上に氷があり、すんなりとは行かないものの、通過できた。

(佐藤)

基本的に、最初のロックバンドを越えてしまえばあとは単調な氷だ。標高の高いところで傾斜は強い、こう言ってしまうと、難しいのだろうと想像できるが、いや、実際難しい。でも、やるべき事はひたすら腕のパンプに耐えてアックスを振り続け、ふくらはぎのパンプとそれに伴う便意にただ耐え忍ぶ事、これに尽きる。何と単純なのだろう。

徐々に傾斜は強くなり、この日も夕暮れ迫る19ピッチ目、いよいよ身体が悲鳴を上げ始めた。そして、見上

げる氷は明らかに前傾している！「氷は垂直以上には発達しない」とのたまわった人間を懲らしめてやりたい。氷柱でなくとも、こういった場所の青氷は垂直以上に発達するものである。場所は第二ロックバンドの直下。これさえ越えれば先は見えてくる。

横山が登り始める。しかしまあ、腕のポンプは最高潮。それでも何とか頑張って大きな岩角まで登るが、スクリューが足りなくなってきた。ここは一旦ロープをフィックスして下に降り、そこでビバークすべきだろう。そう決めて、スクリューで完璧に作ったビレー点で一夜を明かす事にした。

(横山)

一つのハンモックに二人で座り食事の用意をするが、なんと火がつかない。ジェットボイルの自動着火装置はもちろん作動しないのだが、二つのライターまで作動しなかった。もちろん電子ライターなどではなく、石突きのついたライターである。これにはほとんど参ってしまった。一晩中ライターをいじるが、食事も作れず、水も一切飲めなかった。仕方ないので、行動食で我慢していたが、喉はカラカラだ。さらに、ハンモックの居心地もすこぶる悪い。二人で一つのハンモックに寝たり、反対を向いてみたりといろいろ試すが、結局はハンモックからずり落ちるのがオチ。ほとんど一睡もできずに朝を迎えた。

(佐藤)

10/27 4:00起床 6:00出発 7:30敗退決定 8:00下降開始 16:00取付 17:30HC
20P目(J、95°)敗退、垂直の氷を30mほど残して

最高潮の疲労と脱水を身体全体に感じたまま朝を迎えた。最悪の目覚めだ。もうこのまま降りたい、そう思ってしまった。しかし、前日も三日目の朝にそのまま下降を開始した。今回は少しでも悪あがきしたい。まあ今となっては、「降りたい」と思った時点でクライミングは急速に熱気を失うものなのだが。

行動食だけを無理矢理口に押し込め、横山が登り始める。だが、登ってみて疲労が限界ぎりぎりのラインまで達していたのがわかった。昨日登ったラインをトップロープ状態でたどるだけなのに、設置したすべてのスクリューでテンションをかけて休まなければならぬ始末。身体が自分じゃないみたいだ。佐藤もビレーをしながら眠気と闘っていた。二人はもはや登り続けられるような状態ではなかった。横山の右手中指は、極度の脱水症状で感覚がなくなり始めていた。

それでもなお、佐藤がビレー点にやってくるとすぐに次のピッチの準備を始めた。心のどこかでは「もう止める」と叫んでいるのに、他の自分がそれを認めない。何かのきっかけでクラ

イミングが中止になることを心のどこかで願っているのに、それを口に出せないままだった。

相変わらず続く垂直以上の氷を横山が登り始める。どう考えてもこの氷を登りきれそうな身体の状態ではない。その時、空から雪が舞ってきた。気づいた時には、それまで必死に丸め込んできた「敗退」という文字を、僕は迷わずに口にしていた。

(横山)

二人は降りることに決める。佐藤も降りてみてはじめて、自分が今まで経験したことのないような疲労を感じていることがわかった。佐藤が先におり、次に横山が下りてくるのを待っている間に、佐藤が眠り込んでしまっていたこともあった。上から横山に起こされた。気を引き締めるが、どうしても眠い。自分のこの状態に驚いた。こんなことは今までなかった。こんな極寒の状況の中、壁のなか行動中に寝てしまうなんて…。気合を入れるが、意識が飛びそうになる。今考えると、とても恐ろしいのだが、その時は恐怖心などなく、ただ生きて下まで降りようという気持ちであった。最後にスノーバー二本を残置して、ようやく取りつきまで降りてきた。壁を見上げたが、悔しさなど一切ない。今生きているという状況を理解した。HCまですぐそこにあるのだが、果てしなく遠く感じられた。横山も「人生最大にヨレてる

わ。」と言っていた。降りてきて本当によかったと思った。敗退を決めた時に降り始めた雪は、いつの間にか止んでいた。

HCに到着し、再度着火を試みる。何度も試すうちに火が一瞬つき、2日ぶりに水を飲むことができた。食事を食べ、すぐに眠る。

(佐藤)

〈10/28～10/29 HC～C1～BC〉

朝、数日ぶりに日の光を浴びた。暖かい。起きてみると顔や手がむくみ、顔には霜焼けのような痛みがあった。HCを撤収し、BCまで今日中に到着しようと思っていたが、体が思うように動かない。途中で暗くなってしまいそうだったので、C1で一泊することとなった。カンテガの壁が遠くなるにつれ、悔しさが増してくる。二度目の挑戦、不甲斐ない登り、装備チェックの甘さ、精神的未熟さ、反省を挙げたらきりが無い。自分を責めた夜であった。

翌日もどンドンカンテガの壁から遠くなっていく。モレーンを越え、カンテガの壁が見える最後のポイントまで来た。しばらくカンテガを振り返る。悔しさ、生きている喜び、不甲斐なさ、安心感……。いろいろな感情が押し寄せてくる。横山も感極まるものがあったのか「俺は生きてるぞー。」と何度も叫んだ。「クライミングは戦争、戦いだ。自然との調和？ とんでもな

い！」

BCに帰るとコックが少ない材料で美味しいものをたくさん作ってくれた。この上なく美味しかった。

(佐藤)

〈10/31～11/2 下山 カトマンズへその後〉

自分の感情を整理できないままBCを去った。今考えられるのは、ただ「疲れた」。早く下に降りて美味しい飯と酒が欲しい。そして、タイに行って温かな日差しの下フリークライミングをするのだ。

たかだか一ヶ月弱の短時間で、身も心も削ったクライミングだった。思えばネパール到着時から波乱に満ちていた。あそこですべての運を使い果たしたかな？ でもいいのだ。生きていればまたきっと良いことがある。

またこの壁に挑戦するかって？ う～ん、正直しばらくはいいや。もっと他の山に行きたい。何年か経って、この壁を登る自分を想像してゾクゾクとしてくるのなら、その時に行けばいい。ではまたその時まで。

(横山)

(4) 分析

・概要

三日目標高6,580mにて敗退。朝から疲労の色が濃く、前日に張った15mのFIXを登り返す事も難しい。次の

ピッチでは出だしから全身のポンプが激しく、逡巡しているうちに降雪が始まる。これから先一日で山頂を踏んで下降に移る事は難しいと思われた。また、横山の右手凍傷悪化の恐れもあったため、敗退を決定した。下降では極度の睡魔やとの闘い。氷河に降り立った時は本気で助かったと思った。

・敗退の原因

- ①睡眠不足。二日間ビバークして、ほぼ一睡もできず。加えて、二晩目はハンモック一つに二人で腰掛けたため、腰が非常に痛くなった。
 - ②ジェットボイルが点火せず。ライターも点火せず。初日に500ccの水を摂取した以外、全く水を摂取する事ができなかった。飯もろくなものを摂取できず、予備の行動食を切り崩して食べた。横山は初日の夜にすぐ意識が朦朧としてしまい、水を飲まないまま夕飯も食わず。二日目の行動水は、ボトルが凍っていて、なし。完全な脱水状態だった。
- ①、②の条件から、三日目の朝、完全な全身ポンプ状態に陥ったと思われる。また、極度の脱水症状が指先の凍傷未遂を引き起こしたと思われる。必要なのは、「睡眠と水分」これに尽きる。

・対策

- ①ビバークシステムの検討。国内では

一度もハンモックを使用せず。もっと使って対策を練るべきだった。しっかりと張ればそれなりに寝られるし、バッドハンモックの使用等も検討すべきだった。網はハーネスに引っかかるし、シュラフに入るのも難しい。また、二人で腰掛けるのは論外。三日目に全身のポンプがわかった時、もう一度ハンモックを張りなおして休息を取る、等の対策も講じるべきだったかもしれない。

②何としてでも火をつけるべきだった。毎日十分な水分を摂取するのは絶対条件。眠くても、辛くても、絶対に水を飲み、行動用の水を得る。ジェットボイルの自動点火装置をもう一度確認する。絶対に点火するライター、マッチ、ジッポ等を確実に複数用意する。単純に、新品の100円ライターを持っていけば済んだ話かもしれない。ルクラで買うガス缶にも注意が必要。再充填している可能性あり。

③三日目、体に疲れが溜まっていた時、そこで休む、ビバーク地に戻って休む、少し進んで良い場所まで行き、そこで休む、水を作る、等の選択肢をなぜ選ばなかったのか？正直、初日から疲労の色が濃く、凍傷も始まっており、そういった選択肢を考える事自体難しかった。しかし、五日分の食料、燃料を持っていたのだから、そういう事を考える余

地もあった。全てにおいて判断が甘く、経験の浅さが露呈したと云っていい。これまでのアラスカでの経験は何だったのか？冷静に考えれば、実際には山頂に立つのは難しかっただろうし、下降を始めて氷河に降り立った時には、正直言って本気で助かったと思った。あのまま登攀を続けていたら、恐らく右手中指の凍傷は悪化していただろう。だから、下降という選択自体は間違いではなかったと思う。しかし、そこに



レスト中も登る、登る。Chihiro V6を登る横山



アメリカ隊とはH Cで一緒になった。左よりKevin、Freddie、Ben。彼らはNew Hampshire Routeを初登した。

至るまでのプロセスがあまりに安易だ。もっと深く物事を捉え、判断できるクライマーにならないといけない。

・次回への覚書（順不同）

- ・登攀3日+下降1日=計4日で十分
- ・荷揚げシステムの採用（計15kg前後、ミニトラクションを介して手で上げる）
- ・バックロープは8.1mmで十分
- ・10月中旬がベストと思われる
- ・レイヤード上：下着2枚+R1フーディ+アッセンジョニストJKT+マイクロパフフーデッド（防寒用）（一着はフォローが着る、もう一着は荷物に入れる）
- ・レイヤード下：下着2枚+ストレッチエレメントパンツ（もう一枚欲しい）
- ・シュラフは1kg前後の防水が良いのでは？
- ・ジェットボイルに関する考察を進める（寒冷条件で非常に弱い）
- ・ジップロックは日本製に限る
- ・食事は朝晩α米、味をつけて食べる（ジェットボイル食いまわし）
- ・食料が多かった（α米一人一回150g）、100gでOK
- ・ハンモックに関する考察を進める（パッドハンモックの方がよいのでは？）
- ・スノーバーはアルミ製の短いもの

- ・カム#0.3~#2、ナッツ#3~#10、ナイフブレード4本、アングル2本
- ・メラピークでの順応は最高、4日間くらいか？ 山頂での宿泊は良い案と思う
- ・BC~HCまで二日、場合によってはHCで一泊
- ・ハイポーターを雇って上までBC上げられるならベスト、氷河湖周辺が良い
- ・ウェストポーチは再考の余地あり、水は絶対に落ちないように
- ・LEDの軽量なヘッドランプで十分（BDアイコンは必要なし）
- ・アックスの落とし止めはスライド式が良い
- ・アプローチ用にトレッキングシューズ
- ・捨て縄5mm×15~20m
- ・ロープは10mに一回くらいはまとめる
- ・大きな安環（セルフ&ユマール用）兼（すべての引っ掛け用）を一人一個（ペツルフェラータ用）
- ・初日はアプローチ後FIXした方が良い
- ・ガス缶3.5日で2本（食事4回分）
- ・小便ボトルはやはり必要
- ・裁縫具とボンドはHCまで持つていく
- ・ポーター7人700ルピー、キャラバン4日（ルクラ着いた日に行く事も可能）

・会計

収入

内訳	金額
信州大学学士山岳会60周年記念事業	¥400,000
日本山岳会2008年度助成金	¥450,000
合計	¥850,000

支出

内訳	金額	備考
航空券（成田～カトマンズ往復）	¥240,000	格安チケット購入予定
登山許可料（カンテガ・メラピーク）	¥100,000	カンテガ600ドル、メラピーク300ドル
食費	¥60,000	全日程にわたって（行動食含）
装備費	¥60,000	日本で準備する分を含
移動費（カトマンズ～ルクラ往復他）	¥60,000	
宿泊費（カトマンズ・キャラバン中）	¥60,000	バッテリー・安宿等
リエゾンオフィサー	¥150,000	リエゾンは同行せず、基本料のみ
現地エージェント代	¥350,000	スタッフ日当・食費・交通費含
通信費	¥20,000	
合計	¥1,100,000	

・協力

信州大学学士山岳会（信州大学創立
60周年記念事業助成金）

日本山岳会（2008年度助成金）

株式会社ロストアロー（装備各種）

株式会社エルデ（BCAA）

助成金や装備等、様々な援助を頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

(5) おわりに

この遠征から、はや半年以上の月日が経った。いま、カナダのキャンモアという街でこの文章を書いている。つい先日まで、自身4度目となるアラス

カの遠征に行っていたところだ。アラスカでの結果は、あまり自慢できるものではなかった。それ以上に、アラスカはもはや「遠征」というカテゴリーから離れ、限りなくグリーンデに近い存在になってきているということを実感した。

翻ってヒマラヤは？ カンテガは？ と思いをめぐらせてみれば、やはりそこには遠征独特の匂いがプンプンとたちこめているのである。ポーターと共に数日間のキャラバンをこなし、狙うは一つの山。とんでもなく大きくて、それ相応の金がかかる。手続きも面倒だ（カンテガはかなり楽な方だが）。一発勝負だから、それまでに費やした金と時間とエネルギーが今回のように

儂く消えていくことだってある。それでもなお、やはりこういう類の登山は楽しい。アラスカには感じられない、独特の面白さがある。

僕達の2008年カンテガ遠征は、個人的な意見を言えば、惨敗である。あまりにカンテガを、登山をなめすぎていた。準備不足、トレーニング不足、二人の意思疎通の不備、そして、絶対に山頂に立つのだという強い意志の欠如。僕はこんな事をしにここまで来たわけじゃない。そう山を下りながら思った。

もう一つ。登山の素晴らしさのひとつに、未知のものへの挑戦という言葉がある。今回はどうだったろうか？ アプローチの辛さ、壁の急峻さ、実際のクライミングの単調さ……。そういった持ち合わせのネガティブな情報が、自分自身のパフォーマンスを限定してはいなかったらどうか？ それは、自分自身の心の問題でもある。

何も知らずに取付いた2006年のトライは、一方では未熟が故の敗退だったろうが、またある一方では、そのトライはとにかく新鮮で、登山本来の「未知なるもの」に踏み込んでいく

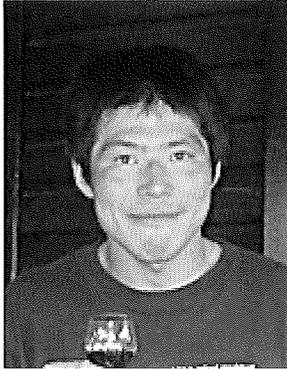
高揚感を十分に味わったクライミングだった。

人はよくこう聞く。「またカンテガに行くの？」と。正直言って今の僕達にその気はない。僕は2006年の時のような登山がしたい。単純に、自分自身に新鮮な風を吹き込みたい。新しいものを見てみたい。もっと素敵なものがあるのなら、それを肌で感じたい。だからこそネパールの後、横山はカナダに、佐藤はニュージーランドに向かった。

一方で、カンテガ北壁ダイレクトの（単純な言葉で言えば）「格好良さ」は半端ではない。僕達の狙ったラインは、北壁のど真ん中を貫いていて、とにかく心にズシんとくるラインだ。New Hampshire Routeを登ったアメリカ隊の一人、Kevinは僕達のラインを「so proud line」と言ってくれた。

だからもし、何年か経ってまたこの壁を思い出して自分が興奮してきたのなら、それを素直に受け止めてまたトライすればいいのだらう。その時のために、今はもっと色々な山に登って自分自身を高めていなければ。ではまたその時に！

メンバー



〈隊長・会計・渉外・地域研究〉

横山 勝丘

[信州大学学士山岳会] 1979年4月5日生 29歳 O型

2005年：

アラスカ ハンティントン南西壁「志士」初登

アラスカ マッキンリー南西壁「デナリダイヤモンド」第3
登

ボリビア イリャンプ北壁ダイレクト初登

2006年：

アラスカ ブロックトウース北壁「ビフォー・ザ・ドーン」
初登

アラスカ ハンター北バットレス「デプリベイション」第3
登

ボリビア ライカコーリュ南壁「アカラント」初登

ボリビア イリマニ南壁「プエルタ・デル・ソル」初登
他



〈食料・装備〉

佐藤 祐樹

[信州大学学士山岳会] 1981年8月5日生 27歳 B型

2005年：

ボリビア イリャンプ北壁ダイレクト初登

2006年：

アラスカ ムースズトウース「ハム&エッグ」

ボリビア イリマニ南壁「パクシフェイス」初登

ボリビア イリマニ南壁「インティフェイス」初登 他